

# 子どもの育ちを促し、地域の連帯を深める保育実践

田口 鉄久

## 要旨

子どもたちは地域の人々や社会的・文化的資源、自然や生き物と関わる体験を通して豊かな学びを得る。一方地域の人々も学校・園の教育・保育活動に関わり、子どもの育ちと学びを支援することを通して、喜びや充実感を得る。この互惠関係が築かれていくことによって、学校・園が核となった地域の活性化、連帯意識の醸成につながる。地域とつながる2つの保育実践事例を通して実証すると共に、今後学校・園でどのように取組めばよいのか、その方策を検討する。

## キーワード

保育実践、子どもの育ち、地域の連携

## 1. テーマ設定の背景

### 1.1 テーマの主旨

子どもは学校・園における教育・保育を通して大きく成長する。しかし学校・園だけで育つわけではない。子どもの育ちの場は、「家庭、学校・園、地域」である。「家庭」では、家族の愛情を受け、日常生活としつけを通して自立した子どもが育てられる。「学校・園」では専門性を身につけた教師・保育者によって一人一人に応じた教育が行われ、学びが培われる。「地域」では、豊かな技能・知識を持つ人々や、伝統・文化・産業・自然等とのふれ合いを通して特色ある多様な学びを得る（図1）。

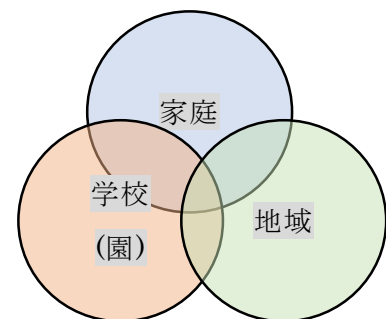


図1 子どもの育ちの場

社会の変化によって子どもの育ちは大きく変容した。従来子どもたちが地域での生活を通して得てきた幅広い学びは現在では薄くなっている。「子どもの育ち」の詳細は後に1.2で述べるが、そんな時代だからこそ学校・園は地域とつながった教育・保育に取組み、地域の教育力を活用する必要がある。これまで地域が担ってきた教育を学校・園も共に取組んでいくことが求められている。そうすることによって子どもの育ちはより豊かになっていく。

多くの地域は人口減少、第1次産業や小規模事業の弱体化が進み、地域の活性化・再生が大きな課題となっている。人口増加の地域においても子ども集団の確立、住民相互の連

帯は必ずしも順調に進んでいるとは言えない。「地域の状況」については後に1.3で述べるが、地域の人々が子どもたちの教育に学校・園と協働して取り組むことによって地域の人々の生き甲斐につながり、さらには地域の活性化・連帯につながる。地域づくりは学校・園との協働によって進展する考え方が示されている。

本研究は地域連携の教育・保育を行うことによって、子どもの育ちが豊かになり、地域の人々の連帯も促し、学校・園を核として地域が活性化することを事例によって示すものである。本研究のテーマは右のように図示することができる(図2)。

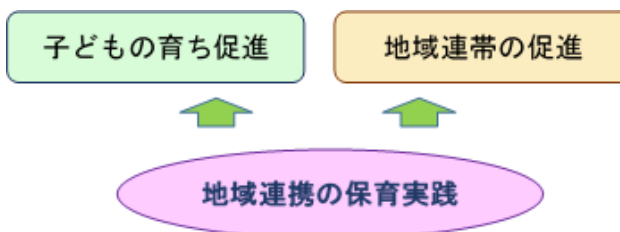


図2 研究テーマのイメージ

## 1.2 地域連携の保育実践は子どもの育ちを促す

情報化、スピード化、大量生産、技術革新によって、子どもは豊かで満たされた日々の暮らしが提供されるようになった。その一方、地域で仲間と共に行う体験や遊びから得る学びやたくましい精神力は不足しがちになっている。地域における異年齢集団のつながりも薄くなっている。

社会における女性の活躍、女性就労への期待の中で、就学に至る乳幼児の育ちが保育所・幼稚園・こども園・学校へ委ねられる現状にある。一部においては経済的に厳しい家庭や、一人親家庭の増加もあり、子どもの貧困が社会の問題になっている。また、子育てに悩みを持つ親や不適切な養育に陥る子育ての問題もある。

このような社会背景の中で子どもが育つ上で重要となることは、地域と連携した教育・保育である。地域の人々に温かく見守られ、安心・安全に育ち、地域の多様な資源と関わる体験を通して生きる力を育み、仲間と共に協同する力を培う。現代の子どもにとって生きる力、協同する力、地域・故郷の人々や自然の良さの発見は、学校・園内の教育・保育だけでは実現しにくい。これからの教育・保育は学校・園内で充実した学びや生活を行うと共に地域の方々との協力を得ながら連携して行うことが求められる。

現在取組まれている学校運営協議会(コミュニティ・スクールの導入)や地域学校協働活動が、その方向性を示す。これは義務教育分野だけではなく、乳幼児の育つ園においても同じ考えで取組まなければならない。

## 1.3 地域連携の保育実践は地域の連帯を深める

これまで学校・園は子どもの学びや育ちにふさわしい環境を整え、専門性の高い教師・保育者が組織的に、また計画的に教育・保育を充実させてきた。しかし社会環境の変化の中で、少子高齢化、核家族化、過疎化—都市化が進み、家庭における親子間の親密な関係は強まる一方、地域における子ども相互のつながりや多様な人々とのつながりは薄くなっている

現実がある。

地域において産業・職業が小規模に分化していた 1970 年代頃まで、人々は相互につながりあって共同体としての地域の発展をめざしてきていた。産業構造が変化し、大規模経営の時代に入り、第 1 次産業に従事する人は減り、小規模の店や事業所も減った。少子高齢化、人口減少の一部地域においてはこれまで行われてきた祭りや団体活動、共同作業等が維持できないところもある。

一方で新しい住宅地や産業エリア等が形成されても、個人・家庭生活重視の中、多様な価値観が交錯し、地域の連帯は必ずしも進まない。

このような社会状況の中、2018（平成 30）年 3 月中央教育審議会は「人口減少時代の新しい地域づくりに向けた社会教育の振興方策について（答申）」で「社会教育」を基盤とした「人づくり、つながりづくり、地域づくり」の方向性を示した。その取組の一つとして「地域学校協働活動の推進」が地域の人材や資源を生かし、地域のネットワーク型行政を進めて、「人づくり、つながりづくり、地域づくり」になることを提言している。

地域の人々が学校・園と協力して子どもの体験を通じた学びを支えることが「幼少期から地域への理解と愛着を育む」と同時に「住民主体の地域づくり、持続可能な共生社会の構築」につながるとしている。つまり、地域とつながる活動は子どもの学びや育ちを豊かにすると共に、地域・団体の人々は生き甲斐を感じ、連帯を深め、地域の活性化・発展につながるのである。

## 2. 研究の目的

子どもたちは地域の人々や社会的・文化的資源、自然や生き物と関わる体験を通して豊かな学びを得る。一方地域の人々も学校・園の教育・保育活動に関わり、子どもの育ちや学びを支援することを通して、喜びや充実感を得ると共に同じ考えをもつ人々との連帯を築き、地域の活性化をめざすことになる。この互恵的な関係を明らかにすると共に、そのための方策を事例を通して検討する。

## 3. 研究の方法

地域とつながる活動として以下の 2 園の事例を取り上げる。

A 幼稚園：研究テーマ「地域と協働して幼児の体験を豊かにするー小さな田んぼづくりー」

B 保育園：研究テーマ「地域に根ざした保育所の役割ー多様な連携を考えるー」

上記 2 事例を検討し、地域の人々から支援を得て教育・保育を行うことが子どもの学びや育ちを促すことを明らかにする。併せて支援に当たった人々の思いを理解する中でその活動が地域の連帯につながっていることを明らかにする。その上で、地域連帯を深める方策について検討する。

いずれの事例も 2018～2019 年にかけて園として取組んだもので、研究の過程で筆者は

研究方法、取りまとめに関して助言した。

園で行った研究を本研究に利用するにあたっては、あらかじめ両園の了承を得た。

## 4. 結果

### 4.1 A 幼稚園「地域と協働して幼児の体験を豊かにするー小さな田んぼづくりー」(5 歳児 28 名) S 教諭実践

#### 4.1.1 A 幼稚園の取組の概要

5月21日、地域の方が田んぼの土と苗を下さった。大きなスチロール箱に土を入れ、苗を植えた。泥の感触を楽しむ子どももいた。苗が生長する様子を想像し、米ができることを語り合った。苗が米になる様子を家の人に聞いてくる幼児や、生長して米になる過程を絵にする幼児もいた。

9月6日、米の収穫をめぐって話し合った。稲刈りの方法について考え、地域の団体事務局へ行って農業に詳しい方から話を聞くことにした。稲刈りは通常の鎌ではなくノコギリ鎌であることを教えてもらった。園で育てた稲は実入りが良くなかったが、刈り方を教えてもらってやってみた。後に地域の田んぼで稲刈りをさせてもらい、歴史民族資料館では昔ながらの脱穀の方法や精米の方法も実際に体験した。

その後、地域の方に手紙を書き、収穫した米を使ったカレーパーティーに招待し、手作りのプレゼントを渡すなどして一緒に楽しんだ。

#### 4.1.2 A 幼稚園の取組のねらいと方法

A 幼稚園では取組のねらいとして以下の3点を掲げている。

地域と触れあい心豊かな子に育つ。  
子どもも保育者も育つ。  
地域の人々の喜び、地域の活性化につながる。

ここで特徴的なことは子どもの育ちだけでなく、保育者の学びにつながり、さらには地域の人々の喜び、活性化をめざしていることである。

取組の方法としては以下の方法をとっている(筆者まとめ)。

地域の人々の好意を受けとめ、柔軟な発想で保育内容化することを考えた。  
時期に応じて子どもと共にどうすればよいか考え、そのつど地域の人々の力を借りた。  
実践記録の検討を行い、子どもの姿、子どもの学び、保育者の配慮、保育者の気づきの視点で振り返った。

園主導の計画ではなく、地域の人々との自然なつながりや交渉を通して随時助けを借りながら取組を進めた。常に地域の人々が示してくださる好意を受け止めて、地域の人々から学ぶ姿勢で協力を求めた。その過程を写真に収めると共に節目ごとに実践記録に残し、

子ども理解、支援のあり方等を振り返った。

#### 4.1.3 A 幼稚園が得た成果

A 幼稚園は得られた成果として以下の3点をあげている。

子どもは地域を知り、人々の温かさを知った。

地域の人々が園や子どもを思ってくくださる気持ちを知った。

子ども・保護者・地域の人々・保育者の協働につながった。

子どもは団体事務所でお世話くださる“まちづくり協議会”の方々や農業に従事する人々とつながり、田植えに始まり収穫・精米に至る米作りの過程を知ると共に地域に田んぼが広がっていること、昔の米作りの方法まで考える機会を得た。この活動を通して子ども・保護者・地域の人々・保育者の協働を作り出した。

#### 4.2 B 保育園「地域に根ざした保育所の役割—多様な連携を考える」（86名在園）N主任 保育士まとめ

##### 4.2.1 B 保育園の取組の概要

B 保育園においては以下の①～④分野で取組を進めた。

##### ①保護者との連携

保護者の悩みの主なものは子どもの食事の問題だと知った。職員で検討し、野菜の栽培、収穫、食事の様子などの写真を掲示することや、市の子育て推進課と連携し、栄養士による保護者講演会を開いた。

##### ②地域との連携

地域の「長寿の会」との交流で、昔の遊びを教えてもらったり、一緒に遊んだりしてふれ合いを楽しんだ。また、地域のお年寄りに畑づくりから野菜の栽培、収穫までを教えてもらいながら一緒に行った。

地域の商店との繋がりも大切にして、日頃から挨拶をしたり、染色のために玉葱の皮集めに協力してもらったりした。また肉屋も訪問し、実物を見て給食の注文をすることもした。

##### ③行政機関（市役所、福祉、防災、医療等）との連携

子どもの命を守るために消防署との総合避難訓練や起震車体験、交通安全教室などを実施してきた。職員の消火訓練について消防署からアドバイスを受けて、実際に子どもたちと一緒に消防署や救急車を見ながら、名称を覚えたりその役割についても学んだりした。地域の交番には交通安全教室の実施や津波訓練の様子の見守りなどを依頼している。

気になる子どもや不安な保護者に対して保育園が窓口になり、個々に応じて専門機関に繋がられるよう、適切な支援に努めている。県の機関である子ども心身発達医療センターや、市の機関である児童発達支援センター等で療育の相談や指導を受けている。

##### ④幼・小・中学校との連携

幼稚園との交流では、子どもたち同士の関わりを持つことや、安心して就学できることを目的に地域内の保育園と幼稚園とが年4回以上の交流の場を持っている。

小学校との交流では年長児が学校へ出向き、小学5年生との交流会や授業体験、給食体験などに参加することで安心して就学できるような配慮している。

毎年中学生による職場体験学習や家庭科授業体験が実施されている。職場体験学習では数名の中学生と3日間を一緒に過ごす。

#### 4.2.2 B 保育園の取組の目的と方法

B 保育園においては以下の3つのねらいをもった。

今までの地域との交流・取組を振り返る。

共に行事を楽しむだけでなく、新たな地域とのかかわり方を探る。

実践を通し新たな課題を見つけ、保育園の役割を捉え直す。

B 保育園はこれまでも地域とのつながりを重視した保育を進めていて、今回取組内容を振り返り、成果を明らかにすると共に新たな方向性について検討しようとした。

取組の方法としては、主に2018年度の地域と連携して行った活動を4つの視点から振り返った。①保護者との連携、②地域との連携、③行政機関との連携、④幼・小・中学校との連携である。この4分野で子ども・保護者・地域の人々の姿を明らかにして、成果と課題を導き出そうとした。

#### 4.2.3 B 保育園の取組の成果

B 保育園は得られた成果として以下の4点をあげている。

保護者の思いに耳を傾け、育児の不安や悩みに気づき、園としての取組ができた。

自分たちの身近な地域のことを知ると共に、保育園のことを知ってもらえる機会にもなり、地域に支えられていると改めて感じる事ができた。

子育ての悩み等に対して保育園が窓口となり、専門機関とつながることでより安心できるようになった。

保幼小中の連携では、幼保交流を通して子ども同士のつながりができ、保護者も就学への安心感が持てるようになった。小中との交流では、お兄さん、お姉さんに甘えたり優しくされたりする経験から憧れを持つようになり、就学への期待にもつながった。

課題としては以下のように述べる。より良い子どもの育ちに必要な地域や様々な機関との繋がりについて、保護者はもちろんのこと、地域への発信や周知を丁寧に行っていく必要がある。今後は、こうした交流が子どもの育ちにどう繋がっていくのか、子ども一人一人を守る為の様々なネットワークをどのように構築し、連携をとっていけばよいかを検討する必要がある。

園内外の子育て世代と身近に関係性を築きながら、保育園が主体となって周知、連携に取り組んでいかなければならない。そのためにも保育園全体として更には職員一人一人が子どもの育ちに必要なネットワークの重要性を意識し、日々の保育に当たることが必要と考えている。

## 5. 考察

①地域連携の保育実践は子どもの育ちを促す、②地域連携の保育実践は地域の連帯を深める、③地域連携の保育実践は園の保育の質を高める、④子どもの育ちを促し地域の連帯を深める保育実践はどのようにして取り組むか、以上4視点から考察する。

### 5.1 地域連携の保育実践は子どもの育ちを促す

#### 5.1.1 A 幼稚園の実践から

古代から今日に至るまで日本人は稲作によって命をつないできた。米は我々の身体を健康に育て、日々エネルギーを与えてくれる。毎日いただく米が食卓にのるまでの過程を知り、感謝の気持ちを持つことは、子どもの育ちにとって大切な学びである。子どもの中には米はどこかの工場で製造され、スーパーマーケット等の店で販売されているものと思っている子もいる。

A 幼稚園の周りには田んぼが広がり、農業も盛んな地域である。子どもと共に米作りに取り組み、その過程を知ることのできる環境にある。A 幼稚園は地域の方々の協力を得て米作りに取り組んだ。子どもは泥の感触を楽しみながら苗植えを体験し、その後の生長の様子を見守り、実りの時を迎えるまで、長い時間を過ごした。地域の方から稲刈りは特別な鎌で行うことを教えてもらい、稲刈りの体験をした。さらに脱穀・精米の必要も知り、歴史民俗資料館を訪れ、昔行われていたそれぞれの過程がよく分かる方法で、白米になる過程を学んだ。

ここで得る学びは感動を伴って獲得する確かな学びである。また、半年にわたって継続する体験に裏付けられた学びである。日々いただく米は長い月日と、多くの人々の働きを経て作られることが分かった。今回 A 幼稚園が取り組んだ地域連携の保育は、幼児期に育みたい「資質・能力」として示された以下の柱にもつながるものである。それは①豊かな体験を通じて、感じたり、気付いたり、分かったり、できるようになったりする「知識及び技能の基礎」、②気付いたことや、できるようになったことなどを使い、考えたり、試したり、工夫したり、表現したりする「思考力、判断力、表現力等の基礎」、③心情、意欲、態度が育つ中で、よりよい生活を営もうとする「学びに向かう力、人間性等」である。

また、「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」として幼稚園教育要領や保育所保育指針等に示された中の協同性、社会生活とのかかわり、思考力の芽生え、自然との関わり・生命尊重、豊かな感性、などにつながることも明らかである。

子どもは米つくりの幅広い体験の中から一人一人自ら求める学びを豊かに得てきたことが、A 幼稚園の実践を通して分かる。

### 5.1.2 B 保育園の実践から

お年寄りとの交流では畑作りを通してお年寄りの優しさ、長年培ってきた知恵や技能を目のあたりにした。遊びや交流では魅力ある遊びを教えてもらい、共に楽しんだ。お年寄りと一緒に暮らす子どもが少なくなっている時代、お年寄りとつながる機会になっている。

地域の八百屋や肉屋を訪れる取組では小規模の店がそれぞれ地域の人々とつながって日常生活に必要な物を売っていることを知る。スーパーマーケットやコンビニが一般化している中、地域の暮らしを担ってきた商店の姿を知ると共に、店の人たちが地域の子どもに暖かなまなざしを向けてもらっていることを知った。

消防署や警察・交番と連携して消防車・救急車の見学や起震体験・消火訓練・交通安全教室などの身を守る体験をした。消防署や警察は災害・犯罪・交通事故などから住民の安全を守っていることを、専門職から直接学ぶと共に、自らの命は自ら守ることの大切さについて体験を通して学んだ。

幼小中との連携では同じ地域で育つ子どもが楽しく交流活動を行うことを通して、互いに知り合い、つながり合うことの喜びを感じている。同じ年代の幼稚園児との交流は地域の子どもとしての仲間意識を育て、共に小学校へ入学することへの期待にもつながっている。また、小中学生との交流ではお兄さんお姉さんの優しさ、頼もしい姿にふれ、憧れの気持ちをもつことになる。地域の異年齢の子どもがつながり合って遊んだり行事に取組んだりする機会が少なくなっている現在、地域の子ども相互をつなげる役割は幼稚園・保育所・こども園の保育者、小中学校の教師に委ねられたと言っても過言ではない。地域の子ども相互のつながりから学び合うことは大きい。

## 5.2 地域連携の保育実践は地域の連帯を深める

### 5.2.1 A 幼稚園の実践から

地域の人から稲と田んぼの土をもらったことをきっかけとして、園で米作りに取組んだ。園が稲刈りの方法を“まちづくり協議会”に尋ねたところ、園児のために稲刈りができるように必要な道具を整えてくださり、園で稲刈り体験ができた。その後、園と相談の上、広い田んぼでの稲刈り体験や、脱穀・精米体験ができるようにしてもらった。12月に行われたカレーパーティーでは園児はお世話になった方々を招待した。

これらの取組を通して地域の人々は以下のような思いを語っている。「頼りにしてもらって元気をもらった」「住んでいる地域のことを知ってほしい、好きになってほしい」「自分たちが子どものころに経験したことを次の世代に伝えたい」などと語った。このことから地域の人々は子どもたちが地域の産業や歴史に目を向け、地域を好きになってほしいと



願っていて、今回それが実施でき、地域の将来への希望につながったと喜んでいることが分かる。それは協力する人々の連帯にもつながったと考えることができる。

### 5.2.2 B 保育園の実践から

子どもや保護者、園は地域の人々、団体、事業所、機関などに支えられ、守られている。一方、B 保育園は地域のネットワーク作りに寄与するという意識をもって地域連携の保育に取り組んでいる。お年寄りを園へ招き子どもとの交流の場をつくり、お年寄りにも楽しい時間を過してもらおう。園児が地域の商店を訪問して買い物をするなど店の人に感謝し、励ましている。消防署や警察・交番と園がつながり、子どもの安全への取組を企画するなどして安全への心構えを培い、期待に応えている。幼・小・中の同年齢・異年齢の子どもとつながり、仲間意識を育て、お兄さん・お兄さんとしての優しさを引き出している。保護者の不安や子どもの育ちについては行政と相談しながら適切な支援がなされるように努力を重ねている。

園が地域の人々や団体、商店等の事業所、行政・教育機関の力を借りるだけではなく、それぞれの果たすべき役割を後押しすると共に、園が中心となって“つながりあい”の関係（ネットワーク）をつくろうとしている。これからの園・学校のあり方を示すと共に、地域社会づくりの方向性も示しているといえる。

## 5.3 地域連携の保育実践は園の保育の質を高める

### 5.3.1 A 幼稚園の保育実践

園においては教育課程・指導計画に基づいた保育を計画的・系統的に行っている。計画的な保育が行われることは当然重要であるが、一方で地域の人々の子どもを思う温かな願いに柔軟に応えることは“地域の園”としての責務でもある。今回地域との連携に係る保育実践（米作り）において、地域の人々の協力を得ながら幼児の興味・関心を広げる取組にしたことは新たな保育創造の一つの方向性を示すものであると考えることができる。

また「米作り」の取組は地域の人々の力を借り、地域の資源を活用し、一つのテーマを長期にわたって追求したことを考えると「米作りプロジェクト活動」と考えることもできる。活動（取組）の様子は写真や子どもの言葉としてまとめた。これはドキュメンテーションである。子どもの学びのプロセスが見える。保育者の振り返り、保護者の理解、子どもの思い出づくりにもつながるものである。

レジャ・エミリアの保育が紹介されるなど、プロジェクト活動が話題になって久しいが、A 幼稚園では地域と協働して子どもが豊かな体験をし、時をかけて多様な学びを重ねる姿を、自然な形で引き出し、結果的にプロジェクト活動と同じ取組にしている。そこでは子どもの興味・関心・疑問を追求する主体的なかかわりが見える。このことによって園の保育の幅が広がり、質の向上が図られた。

### 5.3.2 B 保育園の保育実践

B 保育園は地域連携を幅広くとらえている。園は保護者・地域・関係機関等と多様な連携を行うことを考え、それらのネットワークをつくることによって子どもが守られ、安心して育つことができるとした。園は日々の保育を通して一人一人の子どもの育ちを丁寧に支える。しかし、それは多くの場合、園内で保育者によって行われる。子どもの育つ過程では多様な人々とのふれ合いや支えを通じた学びも必要になる。それを可能にしてくれるのが地域連携の保育である。保護者の力を借りた保育、お年寄りの力を借りた保育、消防署や交番の力を借りた保育、小中学生の力を借りた保育・・・これらは“もう一人の先生”による保育であり、子どもは体験を通して新鮮で生きた学びを与えてもらう。ここで通常の保育とは異なる“新たな保育”が展開する。

A 幼稚園も B 保育園も、園としての新たな保育をつくと共に、保育者としての学びも得ることができた。

## 5.4 子どもの育ちを促し、地域の連帯を深める保育実践はどのようにして取組むか

### 5.4.1 A 幼稚園の実践から言えること

まずは地域を知ることがあげられる。保育者は必ずしも自分の生まれ育った地域で保育に従事するわけではない。地域の歴史、文化、祭り、行事、生き物、植物、山・川・海などの自然、産業、特産、地域で活躍する人々・・・を知ることによって、保育内容として何を取り入れ、生かすことができるのかが分かる（図3）。

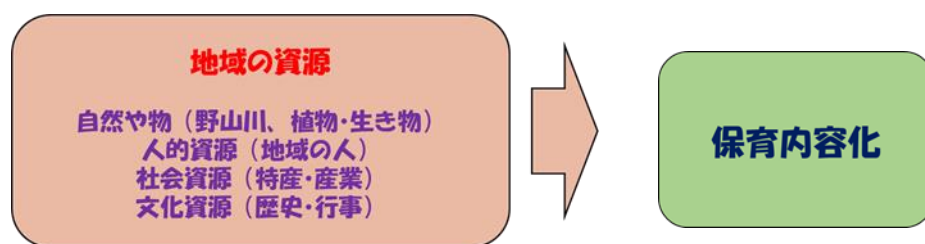


図3 地域資源の保育内容化

本取組が成果をあげたのは地域に協力体制があることを保護者の情報などから知ったことによる。今回は農業（米作り）に焦点化した。取組を“焦点化”したことで成果があった。保育として実践したい内容、子どもにとって有意義な内容は限りなくある。重要なことだからといって多くの活動を取り入れることは子どもからゆとりのある時間を奪うことになり、保育者の焦りにもつながる。地域連携の保育は多くを实践するのが良いというものではない。充実した取組を行うことの重要性を A 幼稚園の実践が提起している。

#### 5.4.2 B 保育園の実践から言えること

地域には様々な人々、団体、店や工場、機関がある。それらは別々の存在ではあるが、園が仲立ちとなることによって“つながり＝連帯”を作り出すことができるという視点に立った。これは園の保育の充実を図る考え方からスタートしているが、連携することを通して協力する立場の人々は子どもの育ちに直接寄与できることの喜びと充実感を感じてもらうことができた。

地域連携は園の保育・子どもの育ちにメリットがあると考えただけでなく、協力してくださる方も喜びを実感し、満たされた気持ちになると考えることができる。その意味で、園も小さいながら確実に地域の連携・ネットワーク作りに貢献しているという理念をもって、できるところから取組む必要がある（図4）。

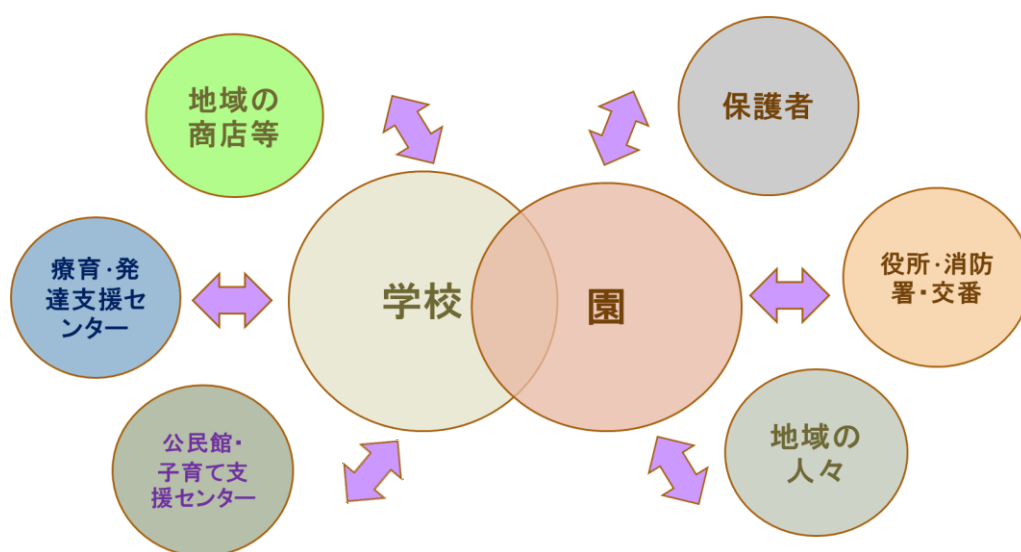


図4 地域のネットワーク作り

#### 6. まとめと今後の課題

地域連携の保育実践は子どもの育ちを促し、地域の連帯を深めることについて、A 幼稚園及び B 保育園の取組を通して考察した。上記の内容を確認した上でさらに地域連携の保育実践は、現行の幼児教育・保育に新たな学びの方法と内容を得させてくれるものであることを確認した。実践のためには地域をよく知り、地域づくりの視点にたつて、無理のない計画として位置づける必要がある。

地域連携の保育が子どもの育ちを促進することは十分確認できたが、地域連帯を促進させることについては、さらなる実態把握を行わなければならない。この点は今後の課題である。協力していただいた地域の人々や団体・機関等の声を丁寧に拾う必要がある。

#### 参考文献

大宮勇雄「レッジョ・エミリヤやニュージーランドの保育者には子どもがどのように見え

ているのだろうか」、松井玲子編『現代と保育』ひとなる書房、2007.11.24  
角尾和子「プロジェクト型保育の実践研究」北大路書房、2008.7.20  
中央教育審議会「人口減少時代の新しい地域づくりに向けた社会教育の振興方策について  
(答申)」、2018.12.21  
文部科学省「幼稚園教育要領」2018.3.31  
ワタリウム美術館(編)、佐藤学(監修)「驚くべき学びの世界ー子どもたちの100の言葉  
ー」(株)ACCESS、2011.3.25

## 付記

本稿は、JSPS 科研費 17K04663「保幼小中接続の相補的アカウントビリティ・システムの開発をめざす教育福祉行政の研究」(研究代表者:藤岡恭子)の研究分担者として行った。

こども教育学部こども教育学科 taguchit@suzuka-jc.ac.jp

# Developing a Childcare Education Framework in Cooperation with the Local Community

Tetsuhisa TAGUCHI

**Keywords :** Developing a framework, Childcare education, Cooperation with the local community